

インターネット社会における新入女子学生の友人とのコミュニケーションと交友関係意識

Newcomer Female University Students' Communications with Friends and Their Consciousness of Friendship in the Internet Society

久 東 光 代¹⁾

KUTO Mitsuyo

尾 崎 かほる²⁾

OZAKI Kaoru

[Abstract] On the basis of a questionnaire survey for 189 female students, this research investigates the relation between the new scale of newcomer university students' consciousness of friendship 2017 (four subscales) and the degree of their use of eight IT communication tools; and the relation between the disclosure by face-to-face communication and the communication through IT tools for four aspects of self-difficulty to tell and the same scale. Through the examination of the survey results with the four subscales, the following tendencies have been identified: (1) The group that is using IT tools more frequently than other groups indicates the significantly higher degree of tendency to be sociable compared with others. (2) The group whose degree of self-disclosure about the four aspects of self-difficulty to tell is higher than others' indicates the significantly higher degree of tendency to be sensitive about others' evaluation on themselves as well as the higher tendency to self-disclosure.

I 問題と目的

パーソナルメディアの多様化と普及は、従来の対面による会話や設置型電話による通話、手紙などの他に、携帯電話/スマートフォンによる通話とメールやパソコンのメールなど、対人コミュニケーション手段の多様化をもたらしてきた。このことは、女子学生の友人とのつき合いやコミュニケーション場面にも影響を与えていると思われるが、特に、携帯電話のメールサービスが始まった1997年以降、女子学生にとって携帯電話/スマートフォンは、友人とのコミュニケーション手段として欠かせない便利なツールとなっている。

しかしながら、このようにメールで気軽に連絡を取り合うことで、時間と場所の制限を超えて人とつながりやすくなって、親密度を深めた人間関係が、かえって「選択的關係」(松田, 2000)を促進することにつながっているという指摘や、携帯メールの利用が、異質な人間関係を広げることより同質的な人間関係を営んでいくために役立っているという指摘(土井, 2008)も出てきた。また、メールによる文字伝達のコミュニケーションの増大は、対面コミュニケーションの減少や

1) 日本女子大学人間社会学部心理学科

2) 元日本女子大学西生田カウンセリングセンター

対人関係スキルの低下を促進することになるのではないかと、危惧する声も聞かれるようになっている。

現在では、パソコンや携帯電話/スマートフォンのメール機能だけではなく、LINEやTwitter、Facebookなどの多様なインターネット(ネット)を利用したコミュニケーション手段が加速度的に普及するようになり、文字伝達によるコミュニケーションが増大している。このようなインターネット(ネット)社会で学生生活を送る女子学生にとって、様々なネットのアプリを利用したコミュニケーションは、友人づくりや友人とのつき合いにおいて日常化し、ネットの利用は女子学生の交友関係意識にも影響を与えていると思われる。

筆者はパソコンや携帯電話のメール機能が女子学生のコミュニケーション手段として普及し始めたことに注目し、パーソナルメディアの多様化が女子学生の友人とのコミュニケーションスタイルや交友関係意識にどのような影響を与えているのかを研究目的に、1998年1月以来、調査研究を続けてきた(尾崎・久東, 1998, 1999, 2000a, 2000b, 2001, 2002, 2003, 007a, 2007b, 2009, 2010, 2012, 2013; 久東・尾崎, 1998, 2000, 2001, 2009, 2012)。これらの研究結果からは、女子学生の同性の友人とのコミュニケーションの内容によって対面と携帯メールの利用の仕方が異なり、深いレベルの自己開示的コミュニケーションにおいては対面が重視されている、という実態が明らかとなった。さらに、自己開示に焦点を当てた研究では、対面と携帯メールの利用度によって「自己開示スタイル」を分類し、筆者が尺度化した「交友関係意識尺度」との関連を検討した(尾崎・久東, 2010)。その結果、「自己開示」、「関わり苦手意識」、「評価過敏・傷つき回避」のすべての尺度において有意差や有意傾向がみられた。また、否定的自己開示度によって「キャンパス内友人に対する否定的自己開示スタイル」を分類し、新たに尺度化した「交友関係意識」との関連についても検討した(尾崎・久東, 2013)。その結果、「自己開示」と「関わり苦手意識」の尺度に有意差がみられ、対面と携帯メールのどちらでも悩みを開示する「対面H・携帯メールH群」の平均値が「自己開示」では最も高く、「関わり苦手意識」では最も低かった。

これまでの研究をふまえ、本研究の目的は、携帯/スマホメールやパソコンメールの他にも多様なネットによるコミュニケーションが普及したネット社会で学生生活を送る新入女子学生の友人とのコミュニケーションと交友関係意識について、(1) 友人に対する携帯メール、LINE、Twitterなど8種類のネットによるコミュニケーション手段の利用度と、今回新たに尺度化した「交友関係意識尺度2017」との関連を検討し、さらには、(2) 普段友人に伝えにくい自己の4側面についての対面とネットによる自己開示度と「交友関係意識尺度2017」との関連を検討することである。

本研究では、まず新たな質問紙によって、新入女子学生の交友範囲(どのようなきっかけで知り合った友人がいるか)と、友人に対するコミュニケーション手段の利用実態を把握し、ネットの利用度によって女子学生を「ネットによるコミュニケーションスタイル」2群に分け、この2群と「交友関係意識尺度2017」との関連を検討する。さらに、友人に伝えにくい自己の4側面についての対面とネットの自己開示度から「伝えにくい自己の側面の自己開示スタイル」を4群に分け、この4群と「交友関係意識尺度2017」との関連を検討する。

Ⅱ 方法

1. 調査対象

本学の西生田キャンパス（人間社会学部）の新入学生（女子学生）を対象に質問紙調査を実施し、不備のある回答を除いた回答者は189名であった。回答者の学科の内訳は、現代社会学科61名、社会福祉学科22名、教育学科25名、心理学科36名、文化学科45名で、年齢は18～20才であった。

2. 調査方法

2017年7月、本学の西生田キャンパス（人間社会学部）の複数の授業中に、質問紙「友人関係とコミュニケーションに関する調査2017」を配布し、調査を実施・回収した。

3. 質問紙

質問紙は、回答者の属性（学科、年齢）、Ⅰ．交友関係の範囲に関する質問、Ⅱ．友人とのコミュニケーション手段の利用度に関する質問、Ⅲ．伝えにくい自己の側面を対面とネットで友人にどの程度自己開示しているかに関する質問、Ⅳ．交友関係意識に関する17の質問項目、Ⅴ．コミュニケーション尺度に関する質問からなる。

4. 分析方法

(1) 友人に対する「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」と交友関係意識

友人に対してどのようなコミュニケーション手段（対面、通話、手紙、パソコンメール、携帯/スマホメール、LINE、Twitter、Facebook、Skype、Instagram、mixi）を利用しているか、4件法（1. まったく利用しない、2. ほとんど利用しない、3. 時々利用する、4. よく利用する）で回答してもらい、さらに、8種類のネット（パソコンメール、携帯/スマホのメール、LINE、Twitter、Facebook、Skype、Instagram、mixi）の利用度を合計してネット利用度得点とした。このネット利用度得点の高低によって「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」を2群に分け、この2群と今回新たに尺度化した「交友関係意識尺度2017」との関連を検討した。

(2) 友人に対する対面とネットによる「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」と交友関係意識

普段伝えにくい自己の側面を友人に伝える自己開示的コミュニケーションに焦点を当てて、榎本（1997）の自己開示質問紙（ESDQ）の項目分類を参考にした自己の4側面（精神的自己の情緒的側面、実存的自己、血縁的自己、身体的自己の性的側面）について、対面とネットで友人にどの程度伝えているのかを4件法（1. 全く伝えていない、2. ほとんど伝えていない、3. 時々伝えている、4. よく伝えている）で回答してもらい、4側面それぞれに対する対面とネットの開示度の平均値をt検定で比較した。

次に、4側面それぞれに対する対面とネットの回答状況（開示度）によって「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」を4群に分類し、さらに、この4群と「交友関係意識尺度2017」との関連を検討した。

Ⅲ 結果と考察

1. 新入生の友人との付き合いの実態

(1) 交友関係の範囲

大学入学後約4か月を経た前期授業終了近くの時期に、新入女子学生がどのようなきっかけで知り合った友人と現在付き合いしているのか、交友関係の範囲について「A. 同性の友人」と「B. 異性の友人または恋人」に分けて質問した結果を、Table 1に示す。

Table 1 交友関係の範囲

		付き合いがある		付き合いがない		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
A. 同性の友人	1. 幼・小・中・高校で知り合った友人	186	98.4	3	1.6	189	100.0
	2. 大学で知り合った同じ学科の友人	189	100.0	0	0.0	189	100.0
	3. 大学で知り合った他学科の友人(目白・西生田キャンパス)	163	86.2	26	13.8	189	100.0
	4. 大学入学後に知り合った他大学の友人	111	58.7	78	41.3	189	100.0
	5. 習い事や趣味で知り合った友人	88	46.6	100	52.9	189	100.0 ¹⁾
	6. アルバイト先で知り合った友人	86	45.5	103	54.5	189	100.0
	7. ネット上で知り合った友人	48	25.4	139	73.5	189	100.0 ²⁾
B. 異性の友人 または恋人	8. 幼・小・中・高校で知り合った友人/恋人	132	69.8	57	30.2	189	100.0
	9. 大学入学後に知り合った他大学の友人/恋人	113	59.8	76	40.2	189	100.0
	10. 習い事や趣味で知り合った友人/恋人	31	16.4	157	83.1	189	100.0 ¹⁾
	11. アルバイト先で知り合った友人/恋人	70	37.0	119	63.0	189	100.0
	12. ネット上で知り合った友人/恋人	16	8.5	172	91.0	189	100.0 ¹⁾

1) 合計に不明1名を含む 2) 不明2名を含む

「A. 同性の友人」については、大学入学前の「幼・小・中・高校で知り合った友人」は98.4%で、ほとんどの学生が入学前からの学校の友人と付き合いを継続しているが、大学入学後4か月しか経っていないにもかかわらず、「大学で知り合った同じ学科の友人」は100.0%が「いる」と回答している。授業やサークルなどで接触する機会があると考えられるが、「大学で知り合った他学科の友人(目白・西生田キャンパス)」も86.2%とかなり多く、新入生の大学入学後の学内での友人づくりはおおむね順調であると言えよう。また、「大学入学後に知り合った他大学の友人」も58.7%と半数を超えていて、「習い事や趣味で知り合った友人」(46.6%)と「アルバイト先で知り合った友人」(45.5%)も半数近く的女子学生に付き合いがあり、新入生の半数前後は自分の大学以外の場でも友人との付き合いがある現状がうかがえる。さらに、「ネット上で知り合った友人」は25.4%で、4人に1人はネット上の同性の友人との付き合いがあることがわかった。

一方、「B. 異性の友人または恋人」については、「幼・小・中・高校で知り合った友人」は約7割の69.8%、「大学入学後に知り合った他大学の友人/恋人」は約6割の59.8%に付き合いがあり、「アルバイト先で知り合った友人/恋人」も約3人に1人の37.0%に付き合いがある。「ネット上で知り合った友人/恋人」は同性の友人よりは少ないものの、8.5%の1年生に付き合いがあることがわかった。

友人づくりが苦手な学生が増えているという指摘もある中で、女子大学という場で学生生活を送り、しかも、入学後4か月にならない時点であるにもかかわらず、新入女子学生がある程度広い範囲で同性と異性の交友関係をもっている実態が浮かび上がった。

(2) 友人とのコミュニケーション手段と利用度

携帯電話やネットに接続したパソコンなどのパーソナルメディアの普及が目立つようになってきたことに注目し、筆者は女子学生のコミュニケーション手段（パーソナルメディア機器）の所有状況について1998年以来数回の調査を実施してきた。その結果をすでにまとめている（尾崎・久東, 2013）が、設置型の電話の所有率が減少する一方で、携帯電話の所有率は2004年以降100.0%を持続し、携帯電話/スマートフォンは今では女子学生にとってコミュニケーション手段として欠かせないツールとなっている。

最初に筆者が調査を実施した1998年から約20年を経て、携帯電話やスマートフォンのメール機能やパソコンのメールの他にも、LINE、Twitter、Facebookなどネットを利用したコミュニケーション手段はさらに多様化している。そこで、今回は、女子学生が友人とコミュニケーションをとる時にどのようなコミュニケーション手段をどの程度利用しているか調査し、4件法（1. まったく利用しない、2. ほとんど利用しない、3. 時々利用する、4. よく利用する）による回答結果をTable 2 に示した。

Table 2 友人とのコミュニケーション手段と利用度

	1. まったく利用しない		2. ほとんど利用しない		3. 時々利用する		4. よく利用する		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1. 対面(実際に会って話す)	0	0.0	1	0.5	6	3.2	182	96.3	189	100.0
2. 通話(固定電話や携帯電話で話す)	15	7.9	62	32.8	70	37.0	42	22.2	189	100.0
3. 手紙	108	57.1	60	31.7	19	10.1	1	0.5	189	100.0 *
4. パソコンメール(大学・自宅のメール)	114	60.3	52	27.5	15	7.9	8	4.2	189	100.0
5. 携帯/スマホのメール	50	26.5	68	36.0	39	20.6	32	16.9	189	100.0
6. LINE	1	0.5	0	0.0	6	3.2	182	96.3	189	100.0
7. Twitter	35	18.5	14	7.4	33	17.5	106	56.1	189	100.0 *
8. Facebook	150	79.4	22	11.6	13	6.9	4	2.1	189	100.0
9. Skype	156	82.5	21	11.1	10	5.3	2	1.1	189	100.0
10. Instagram	58	30.7	24	12.7	33	17.5	74	39.2	189	100.0
11. mixi	185	97.9	4	2.1	0	0.0	0	0.0	189	100.0

* 合計に不明1名を含む

「3. 時々利用する」と「4. よく利用する」に対する回答を合計した「利用しているコミュニケーション手段」をみていくと、「対面（実際に会って話す）」は99.5%で、「通話（固定電話や携帯電話で話す）」は59.2%であった。1998年に調査を開始した時には、パソコンのメールによるコミュニケーションが普及し始めた頃であったが、今回の2017年7月の調査では、「パソコンメール」は12.1%、「携帯/スマホのメール」は37.6%で、メールの利用はそれほど多くない。目立つのは「LINE」の99.5%で、現在の新入女子学生のほぼ全員が友人に対して「対面」と「LINE」の両方の手段によってコミュニケーションをとっていることがわかった。その他「Twitter」（73.6%）や「Instagram」（56.7%）の利用度も高く、「LINE」の他にも多様なネットの利用によるコミュニケーションが、女子学生の友人とのつき合いに日常化していることがわかる。

2. 「交友関係意識尺度」の再尺度化

1998年の調査（尾崎・久東, 1999）以来、パーソナルメディアの利用によるコミュニケーションが交友関係意識のどの側面に影響を与えているかを測定するために、筆者は質問項目の検討を重ねて「交友関係意識尺度」を作成してきた（尾崎・久東, 1999；2002；2007a；2010；2013）。

2009年1月の調査では16項目で実施し、回答者156名の全項目に対する評定値により因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、最終的に13項目についての因子分析の結果、4因子（因子1：他者評価過敏、因子2：自己開示、因子3：関わり苦手意識、因子4：自己表現回避）が抽出された。

今回の2017年7月の調査では、質問項目を再検討して17項目で実施し、回答者189名の全項目に対する評定値により改めて因子分析を行った。尺度化の方法としては、「1.全くあてはまらない」「2.あまりあてはまらない」「3.ややあてはまる」「4.よくあてはまる」の4件法による回答結果に1～4の評定値を与え、回答者189名の全17項目に対する評定値により因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、Table3の通り4因子が抽出され、「交友関係意識尺度2017」とした。

Table 3 「交友関係意識尺度2017」因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
因子1: 他者評価過敏 α 係数=.813 尺度得点=16					
10. 自分が友人からどう評価されているのか、気になる	.801	-.008	.075	.201	.688
3. 友人に嫌われるのではないかと恐れている	.729	-.120	-.153	.167	.598
12. 友人に「つまらない人」と思われているのではないかと気になる	.609	.024	.022	.374	.511
8. 友人とのつき合いで、自分が傷つくのを恐れている	.546	.117	-.116	.371	.463
因子2: 自己開示 α 係数=.788 尺度得点=16					
7. 自分が不安になったり落ち込んだ時に、友人に相談する	.027	.796	.091	.024	.644
14. 自分で解決できない問題を抱えた時、友人に助けを求めるようにしている	.062	.692	.250	.001	.545
5. 自分の心の内を、友人に打ち明ける方だ	-.131	.652	.084	-.148	.471
17. 友人に、自分の進路についての悩みを話すことがある	.011	.609	.064	-.090	.383
因子3: 社交性 α 係数=.734 尺度得点=20					
13. 数人のグループでも、友人たちとの雑談を楽しめる	-.071	.128	.666	-.212	.510
2. 友人をつくるのは苦手だ*	.273	-.212	-.649	.156	.565
4. 友人のグループでつき合うのに、抵抗を感じない	-.189	.037	.589	.075	.390
15. なるべく多くの友人を作りたいと思う	.294	.121	.560	-.027	.415
9. キャンパスで友人に会ったら、自分から話しかけたいと思う	.061	.073	.518	-.061	.281
因子4: 自己表現苦手意識 α 係数=.661 尺度得点=16					
11. 対面で友人に間違いを指摘することができない	.238	-.100	-.035	.654	.496
1. 面と向かうと、思っていることを友人にはっきり言えない	.311	-.230	-.157	.541	.467
16. 友人に、対面で頼みごとを言いにくい	.117	-.121	-.171	.512	.319
6. 友人と意見が異なる時は、面と向かうと相手に合わせてしまいがちだ	.106	.046	.008	.438	.206
因子寄与	2.248	2.100	1.972	1.631	
累積寄与率(%)	13.226	25.576	37.179	46.771	

* は逆転項目

因子1は、友人からどう評価されているか気になったり、友人に嫌われたり友人関係で傷つくのを恐れるというように、友人からの評価に敏感な傾向を表しているので、「他者評価過敏」因子と命名した。因子2は、不安になったり落ち込んだ時に友人に相談したり、進路についての悩み、

心の内を打ち明けるなど、深いレベルでの自分自身を相手に伝える傾向を表しているので、「自己開示」因子と命名し、因子3は、グループで友人たちと雑談を楽しんだり、友人づくりに積極的な傾向を表す因子で、「社交性」因子と命名した。因子4は、対面で友人に思っていることをはっきり言えなかったり間違いを指摘しにくいというように、友人との対面でのアサーティブなコミュニケーションが苦手な傾向を表わす因子で、「自己表現苦手意識」因子と命名した。

さらに、この4つの下位尺度ごとに信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出したところ、因子1が0.813、因子2が0.788、因子3が0.734、第4因子が0.661となった。3因子の信頼性係数の値が0.7を超えていて、第4因子も0.7に近い数値なので、おおむね高い内的整合性が確認できた。

3. 友人に対するネット利用度によるコミュニケーションスタイルと交友関係意識

(1) 友人に対する「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群

1 (2) の友人に対するコミュニケーション手段と利用度 (Table 2) から、新入女子学生は、「対面」に加えて「LINE」を中心とした多様なネットを通して友人とコミュニケーションをとっていることがわかった。そこで、「対面+ネット」という手段を通して友人とコミュニケーションをとっている女子学生のコミュニケーションスタイルを、ネット利用度の高低で2群に分けることにした。

まず、対面（実際に会って話す）に対する回答が「2. ほとんど利用しない」の1名を除く188名について、Table 2の4. パソコンメール、5. 携帯/スマホのメール、6. LINE、7. Twitter、8. Facebook、9. Skype、10. Instagram、11. mixi の8種類のネット利用度に対する4件法の回答を合計し、ネット利用度得点とした。188名のネット利用度得点は11～25点で、平均値は17.16だった。このネット利用度得点の高低によって2群に分けるために、平均値に近い17点の26名を除き、利用度得点が11～16点までの「ネット利用度L（低）群」と、18～25点の「ネット利用度H（高）群」の2群に分類し、「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」として示したのがTable 4である。

Table 4 「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群の分布

コミュニケーション スタイル	人数	%	ネット利用度 平均値	分類基準
ネット利用度L(低)群	78	48.2	14.26	ネット利用度得点 11～16
ネット利用度H(高)群	84	51.8	19.32	ネット利用度得点 18～25
合 計	162	100.0		

(2) 「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群と交友関係の範囲

女子学生の友人に対するネットの利用度と交友関係の範囲（広いか狭いか）との関連をみるために、1. (1) の「Table 1 交友関係の範囲」の「A. 同性友人」の1～6、「B. 異性の友人または恋人」の8～12の12種類の友人について「つき合いがある」との回答を得点化（12点満点）し、「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群（「ネット利用度L（低）群」の人数は、友人とのつき合いに未回答の2名を除いて76名となっている）の交友関係範囲得点の平均値でt検定し、その結果をTable 5に示した。

その結果、「ネット利用度L(低)群」より「ネット利用度H(高)群」の平均値が高く、有意差($p<.01$)がみられた。対面に加えて様々なネットでは友人とのコミュニケーションをとっている女子学生は、ネットの利用が少ない者より交友関係の範囲が広く、様々なきっかけで知り合った友人とのつき合いがある。ネットの利用が友人づくりや友人関係を維持していく上で役立っている可能性が示唆された。

Table 5 「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群における交友関係範囲による比較

コミュニケーションスタイル	人数	交友範囲 平均値	SD	t値	有意確率
ネット利用度L(低)群	76	5.87	2.07	-3.552	.001 **
ネット利用度H(高)群	84	7.12	2.35		

** $p<.01$

(3) 「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群と「交友関係意識尺度2017」との関連

友人とのコミュニケーション手段として、対面に加えてネット利用度の高低が交友関係意識とどのように関連しているかについてみるために、「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群(Table 4)で「交友関係意識尺度2017」4因子の尺度値平均の比較をt検定によって行った結果を、Table 6に示した。

Table 6 「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群における「交友関係意識尺度2017」尺度値平均の比較

交友関係意識尺度	ネットコミュニケーション スタイル	尺度値平均	SD	t値	有意確率
1.他者評価過敏 16点満点(10, 3, 12, 8)	ネット利用度L(低)群	10.59	3.07	-.689	.492
	ネット利用度H(高)群	10.89	2.47		
2.自己開示 16点満点(7, 14, 4, 17)	ネット利用度L(低)群	10.96	2.70	-1.242	.216
	ネット利用度H(高)群	11.49	2.74		
3.社交性 20点満点(13, 2r, 4, 15, 9)	ネット利用度L(低)群	13.92	3.04	-3.080	.002 **
	ネット利用度H(高)群	15.31	2.69		
4.自己表現苦手意識 16点満点(11, 1, 16, 6)	ネット利用度L(低)群	9.83	2.43	.472	.638
	ネット利用度H(高)群	9.65	2.39		

** $p<.01$

「他者評価過敏」、「自己開示」、「自己表現苦手意識」の3つの尺度については、「ネット利用度L(低)群」と「ネット利用度H(高)群」に有意差は認められなかったが、「社交性」については、「ネット利用度H(高)群」の尺度値平均が「ネット利用度L(低)群」より高く、有意差($p<.01$)がみられた。

このことから、友人に対して実際に会うだけではなく、ネットによるコミュニケーションも多くとっている女子学生は「社交性」との関連が高く、多様なネットの利用が友好的な友人関係を促進するツールとして役立っている可能性があることがわかった。

4. 友人に対する対面とネットによる伝えにくい自己の側面についての自己開示と交友関係意識

(1) 対面とネットによる伝えにくい自己の側面についての自己開示度

女子学生は、対面に加えてLINEやTwitterなど多様なネットによって友人とコミュニケーションをとっているが、ありのままの自分を伝える自己開示的コミュニケーションにおいて、特に伝えにくい自己の4側面（1. 精神的自己の情緒的側面、2. 実存的自己、3. 血縁的自己、4. 身体的自己の性的側面）について、対面とネットでどの程度伝えているのかを4件法（1. 全く伝えていない、2. ほとんど伝えていない、3. 時々伝えている、4. よく伝えている）で回答してもらい、対面による自己開示度の平均値とネットによる自己開示度の平均値をt検定で比較した結果をまとめて示したのが、Table7である。

伝えにくい自己の4側面は、榎本（1997）の自己開示質問紙（ESDQ）の項目分類における自己の11側面、すなわち精神的自己（①知的側面、②情緒的側面、③志向的側面）、身体的自己（④外見的側面、⑤機能・体質的側面、⑥性的側面）、社会的自己（私的人間関係の側面：⑦a同性関係・⑦b異性関係、⑧公的役割関係の側面）、⑨物質的自己、⑩血縁的自己、⑪実存的自己、を参考にしている。2016年11月に筆者の授業中に受講生に榎本の自己の11側面を示し、「友人に対して普段よく自己開示している内容とあまり自己開示していない内容」について第1位から第3位を回答してもらったが、今回の調査では、「あまり自己開示していない内容」についての回答結果の第1位から第4位までを4側面（1. 精神的自己の情緒的側面、2. 実存的自己、3. 血縁的自己、4. 身体的自己の性的側面）としてとりあげ、榎本の質問項目を参考にして質問を作成した。なお授業の回答結果では、「あまり自己開示していない内容」の第1位は実存的自己、第2位が精神的自己の情緒的側面、第3位が身体的自己の性的側面、第4位が血縁的自己であった。

Table 7 対面とネットによる伝えにくい自己の側面についての自己開示度

自己の側面	質問項目	対面平均値	ネット平均値	t値	有意確率
精神的自己(情緒的側面)	1. 傷ついた経験や落ち込んだ気持ちについて	3.02	2.39	7.893	.000 ***
実存的自己	2. 疎外感や孤独感について	2.24	1.94	4.063	.000 ***
血縁的自己	3. 家族に対する不満や心配事について	2.50	1.87	8.701	.000 ***
身体的側面(性的側面)	4. 性に関する関心や悩みについて	1.94	1.62	4.999	.000 ***

*** p<.001

女子学生が普段自己開示しにくい自己の側面を友人に伝える場面では、面と向かって伝えるよりネットによる手段の方が伝えやすい側面があるのではないかと推測されたが、4側面（1. 精神的自己の情緒的側面、2. 実存的自己、3. 血縁的自己、4. 身体的自己の性的側面）すべてにおいて、対面の自己開示度の平均値がネットの平均値より高く有意差（ $p<.001$ ）が認められ、友人に対面で自己開示する女子学生が多いという結果が得られた。

2009年1月の調査（尾崎・久東，2013）では、「自己開示質問項目」により友人への肯定的自己開示度と否定的自己開示度についてコミュニケーション手段（対面と携帯メール）によって差があるかについて比較したが、肯定的自己開示度と否定的自己開示度のどちらにおいても10側面すべてにおいて携帯メールより対面の平均値が高く有意差が見られ、友人に対する自己開示的コミュ

ニケーションにおいては、女子学生は携帯メールより対面で伝えることを重視しているという結果が得られた。その後10年近くを経て、携帯メールの他にもLINEやTwitterなど多様なネットによるコミュニケーション手段が普及した中での今回の調査でも、普段伝えるに感じていた深いレベルの自己開示的コミュニケーションにおいては、ネットを利用するより実際に友人に会って伝える女子学生が多いことがわかった。

(2) 「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」4群と「交友関係意識尺度2017」との関連

友人に伝えにくい自己の4側面(1.精神的自己の情緒的側面、2.実存的自己、3.血縁的自己、4.身体的自己の性的側面)について、対面とネットでのどの程度伝えているのかを4件法(1.全く伝えていない、2.ほとんど伝えていない、3.時々伝えている、4.よく伝えている)による回答結果から、4側面それぞれに対する回答状況(開示度)によって自己開示スタイルを4群に分類し、特徴を比較検討しやすいようにした。

自己の4側面それぞれに対する対面による開示度の平均値(9.13)とネットによる開示度の平均値(7.89)を分類基準として、対面とネットの両方の開示度が低い「対面L(低)・ネットL(低)群」、対面が低くネットが高い「対面L(低)・ネットH(高)群」、対面が高くネットが低い「対面H(高)・ネットL(低)群」、対面とネットともに高い「対面H(高)・ネットH(高)群」の4群に分類し、「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」として示したのが、Table 8である。

Table 8 「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」4群の分布

自己開示スタイル	人数	%	分類基準
対面L(低)・ネットL(低)群	67	35.4	対面開示度9以下・ネット開示度7以下
対面L(低)・ネットH(高)群	32	16.9	対面開示度9以下・ネット開示度8以上
対面H(高)・ネットL(低)群	26	13.8	対面開示度10以上・ネット開示度7以下
対面H(高)・ネットH(高)群	64	33.9	対面開示度10以上・ネット開示度8以上
合 計	189	100.0	

さらに、「交友関係意識尺度2017」4因子の尺度得点を従属変数とし、分散分析により「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」4群で尺度値平均の比較を行った結果を、Table 9に示した。

分散分析の結果、「社交性」尺度と「自己表現苦手意識」尺度には有意差が見られなかったが、「他者評価過敏」尺度と「自己開示」尺度に有意差($p<.05$ と $p<.001$)がみられた。

「他者評価過敏」尺度では「対面H(高)・ネットH(高)群」の尺度値平均が最も高く、「対面H(高)・ネットL(低)群」の尺度値平均が最も低かった。多重比較の結果、「対面H(高)・ネットH(高)群」と「対面H(高)・ネットL(低)群」の間に有意差がみられ、伝えにくい自己の側面を対面とネットの両方で多く自己開示をしている女子学生は、対面優位で自己開示をしている女子学生より他者からの評価により敏感な傾向が見られた。

「自己開示」尺度では「対面H(高)・ネットH(高)群」と「対面H(高)・ネットL(低)群」の尺度値平均が高かった。多重比較の結果、「対面H(高)・ネットH(高)群」と「対面L(低)・ネットL(低)群」及び「対面L(低)・ネットH(高)群」の間、さらに「対面H(高)・ネットL(低)群」と「対面L(低)・ネットH(高)群」及び「対面L(低)・ネットL(低)群」の間に有意傾向が見られた。伝えにくい自己の側面をネットだけではなく対面で伝えることが多い女子学生は自己開示度が高い傾向があるといえよう。対面とネットの両方の自己開示度が高い「対面H(高)・ネットH(高)群」の尺度値平均が特に高かったことから、ネットの利用が女子学生に伝えにくい気持ちを軽減している可能性がうかがえる。

これらの結果から、普段伝えにくい自己の側面について、対面に加えてネットでも多く伝えている女子学生は「自己開示」が高いが、一方では、「他者評価過敏」傾向の高さも認められ、対面優位の女子学生ではその傾向は低かったことから、ネットの利用は自己開示度を高めている反面、他者からの評価に敏感な心性を助長する可能性も示唆された。

Table 9 「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」4群における「交友関係意識尺度 2017」尺度値平均の比較

交友関係意識尺度	自己開示スタイル	尺度値平均	SD	F 値	有意確率
1.他者評価過敏 16点満点(10, 3, 12, 8)	対面L(低)・ネットL(低)群	10.18	2.79	3.757	.012 *
	対面L(低)・ネットH(高)群	11.06	2.93		
	対面H(高)・ネットL(低)群	10.08	2.76		
	対面H(高)・ネットH(高)群	11.59	2.44		
2.自己開示 16点満点(7, 14, 4, 17)	対面L(低)・ネットL(低)群	10.15	2.82	11.130	.000 ***
	対面L(低)・ネットH(高)群	10.35	2.73		
	対面H(高)・ネットL(低)群	11.77	2.03		
	対面H(高)・ネットH(高)群	12.42	2.00		
3.社交性 20点満点(13, 2r, 4, 15, 9)	対面L(低)・ネットL(低)群	14.48	3.19	0.240	.869
	対面L(低)・ネットH(高)群	14.56	2.93		
	対面H(高)・ネットL(低)群	15.04	2.36		
	対面H(高)・ネットH(高)群	14.67	2.83		
4.自己表現苦手意識 16点満点(11, 1, 16, 6)	対面L(低)・ネットL(低)群	9.73	2.18	1.290	.279
	対面L(低)・ネットH(高)群	10.63	2.67		
	対面H(高)・ネットL(低)群	9.58	2.86		
	対面H(高)・ネットH(高)群	9.80	2.24		

*** p<.001 * p< .05

IV まとめと今後の課題

新入女子学生を対象とした質問紙調査(2017年7月)の結果から本研究をまとめると、(1)～(6)の通りである。

- (1) 新入女子学生の交友関係の範囲については、「同性の友人」では、大学入学前からの「幼・小・中・高校で知り合った友人」は 98.4%。大学入学後の「大学で知り合った同じ学科の友人」は 100.0%、「他学科の友人」も 58.7% と半数を超えていて、入学して 4 か月近くの

時点での友人づくりがおおむね順調であることがうかがえた。また、「異性の友人または恋人」とのつき合いでは、大学入学前からの「幼・小・中・高校で知り合った友人」は7割近くの69.8%、「大学入学後に知り合った他大学の友人/恋人」も37.0%あり、異性とのつき合いを積極的に求めなくなっているという一般的な傾向は見られなかった。

- (2) 新入女子学生が友人とコミュニケーションをとる手段と利用度(「時々利用する」と「よく利用する」への回答)については、対面(99.5%)とLINE(99.5%)が第1位で、第3位がTwitter(73.6%)、第4位がInstagram(56.7%)、第5位が携帯/スマホのメール(37.6%)で、女子学生にとっては対面に加えてLINEを中心とする多様なネットの利用が欠かせないコミュニケーション手段となっていることがわかった。
- (3) LINEほか8種類のネットの利用度の高低によって「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」を2群に分類し、交友関係の範囲の広さで比較した結果、ネットの利用度が高い「ネット利用度H(高)群」が「ネット利用度L(低)群」より広範囲の交友関係があることがわかった。
- (4) 「ネット利用度によるコミュニケーションスタイル」2群と、新たに尺度化した「交友関係意識尺度2017」との関連を検討した。その結果、「社交性」尺度に有意差がみられ、「ネット利用度H(高)群」の尺度値平均が「ネット利用度L(低)群」より高かった。多様なネットの利用は、女子学生にとって友人づくりを促進する上で役立っている可能性が示唆された。
- (5) 普段友人に伝えにくい自己の4側面について、対面とネットによる自己開示度で比較した結果、4側面すべてにおいてネットより対面の平均値が高く、有意差が認められた。伝えにくい自己の側面を伝える自己開示場面でも、女子学生はネットより対面で多く友人に伝えていることがわかった。
- (6) 伝えにくい自己の4側面についての対面とネットによる自己開示度の高低によって、「伝えにくい自己の側面についての自己開示スタイル」を4群に分類し、「交友関係意識尺度2017」との関連を検討した。その結果、「社交性」尺度と「自己表現苦手意識」尺度には有意差が認められなかったが、「他者評価過敏」尺度と「自己開示」尺度に有意差がみられた。「対面H(高)・ネットH(高)群」は「自己開示」の尺度値平均が最も高かったが、「他者評価過敏」の尺度値平均も最も高く、「対面H(高)・ネットL(低)群」の「他者評価過敏」の尺度値平均は最も低かった。伝えにくい自己の側面について対面に加えてネットで自己開示する女子学生は、ネットの利用によって、本来は伝えにくいと感じているような深いレベルの自己開示をしやすくなっていることがうかがえたが、ネットの利用が他者からの評価に過敏な心性を助長する可能性も示唆された。

今回の調査では、多様なネットによるコミュニケーションが可能になったネット社会において、大学入学後約4か月の新入女子学生の友人とのつき合いの現状を把握し、対面とネットの利用度や伝えにくい自己の側面についての対面とネットによる自己開示度から交友関係意識との関連を検討した。その結果、女子学生のキャンパス内の同じ学科の友人づくりや他学科の友人づくりがおおむね順調であることがわかった。また、友人とのコミュニケーション手段としては、現在で

も実際に会って話す「対面」が重視されている一方で、LINEをはじめとする多様なネットによるコミュニケーションも活発に行われ、多様なネットの利用は交友関係の範囲を広げる上で役立っている可能性もうかがえた。さらに、「交友関係意識尺度2017」との関連では、対面に加えてネットの利用度が高いことと「社交性」との間に関連がみられ、対面にネットの利用が加わることは、女子学生にとって友好的な人間関係を構築して上で助けとなっている可能性が示唆された。

また、女子学生にとって普段伝えにくい自己の側面を友人に自己開示するコミュニケーションにおいては、ネットの方が伝えやすい側面があるのではないかと推測されたが、ネットより対面で伝えている女子学生が多く、ネットの普及が対面での深いレベルのコミュニケーションを阻害し、友人関係を希薄化させているという指摘とは異なる結果が得られた。さらに、「交友関係意識尺度2017」との関連からみると、「自己開示」と「他者評価敏感」の2つの尺度に有意差がみられたことから、対面にネットの利用も加わることで、伝えにくい自己の側面についての自己開示が促進される可能性がある反面、他者からの評価に過敏な傾向も助長している可能性が示唆された。ネットより対面優位に伝えにくい自己の側面を自己開示する女子学生は、他者からの評価に過敏な傾向が低かったことから、他者の顔色をうかがったり傷つくのを過剰に恐れず、オープンでしかも深い友人関係をつくっていくには、伝えにくい側面であっても、対面で友人に伝えていくことが大事なのではないかと思われる。

今後の研究課題としては、ネットの利用とコミュニケーションスキルとの関連を検討することや、大学生活に馴染んだ大学3年生や、高校生にも調査を実施して比較することも検討していきたい。

文献

- 秋田正人・浅野智彦・松崎霜樹 (2007) シンポジウム インターネット時代の人間関係. こころの健康, 221, 20-50.
- 浅野智彦編 (2006) 検証・若者の変貌—失われた10年の後に. 勁草書房.
- 土井隆義 (2008) 友だち地獄「空気を読む」世代のサバイバル. 筑摩書房.
- 土井隆義 (2017) 講演「ぼっちが怖い! ~大学生の人間関係をめぐる現状と課題~」. 2016年度明治大学学生相談室報告. 4-27.
- 榎本博明 (1986) 自己開示. 詫摩武俊監修, パッケージ・性格の心理第5巻. ブレーン出版, 26-40.
- 榎本博明 (1987) 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について. 心理学的研究, 58, 91-97.
- 榎本博明 (1997) 自己開示の心理学的研究. 北大路書房. 9
- 榎本博明 (2010) 人間関係の心理学 (おうふう心理ライブラリー). おうふう.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口央 (2005) 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連. 対人社会心理学研究, 5, 21-29.
- 石川勝博 (2009) ケータイ・コミュニケーションの功罪とその対応に向けて. 教育と医学, 672, 32-39.
- 岩田孝・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸 (2006) 若者たちのコミュニケーション・サバイバル—親密さのゆくえ—. 恒星社厚生閣.
- 児玉真樹子・三根拓己・高本雪子・深田博己 (2004) 自己開示に及ぼす親密さとコミュニケーションメディアの影響. 広島大学心理学研究 4, 77-87.
- 久東光代・尾崎かほる (1998) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(1). 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 188.
- 久東光代・尾崎かほる (2000) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(4). 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 155.
- 久東光代・尾崎かほる (2001) ネット社会と女子学生の友人関係Ⅰ. 日本人間性心理学会第20回大会発表論文集, 146-147.
- 久東光代・尾崎かほる (2009) 女子学生の友人への自己開示についての一考察(2)—自己開示スタイルと交友

- 関係意識との関連一. 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 413.
- 久東光代・尾崎かほる (2012) 女子学生の同性友人とのコミュニケーションと交友関係意識(1)一対面と携帯メールによるコミュニケーション内容と交友関係意識一. 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 355.
- 松田美佐 (2006) 若者友人関係と携帯電話利用一関係希薄化論から選択的關係論へ. 社会情報学研究, 4,
- 岡田朋之・松田美佐 (2012) ケータイ社会論. 有斐閣.
- 岡田努 (2007) 現代青年の心理学. 世界思想社.
- 岡田努 (2012) 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成一傷つけ合うことを回避する傾向を中心として. 金沢大学人間科学系研究紀要 4, 19-34.
- 尾崎かほる (2001) 女子学生の友人とのコミュニケーションについて. 日本女子大学カウンセリング・センター報告, 24, 1-4.
- 尾崎かほる (2007) メール時代の女子学生の友人関係一授業のアンケート結果より. 日本女子大学カウンセリング・センター報告, 30, 1-10.
- 尾崎かほる (2011) 新入女子学生の友人関係について一前期授業のアンケート結果 (2004 ~ 2011 年度) より. 日本女子大学カウンセリング・センター報告, 34, 20-35.
- 尾崎かほる・久東光代 (1998) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(2). 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 189.
- 尾崎かほる・久東光代 (1999) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(3). 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 656.
- 尾崎かほる・久東光代 (2000) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識. 日本女子大学紀要人間社会学部, 10, 223-236
- 尾崎かほる・久東光代 (2000) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(5). 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 156.
- 尾崎かほる・久東光代 (2001) ネット社会と女子学生の友人関係Ⅱ. 日本人間性心理学会第20回大会発表論文集, 148-149.
- 尾崎かほる・久東光代 (2002) インターネット社会と女子学生の友人関係意識. 日本女子大学紀要人間社会学部, 12, 65-75.
- 尾崎かほる・久東光代 (2003) パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(6). 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 271.
- 尾崎かほる・久東光代 (2007a) 女子学生の友人とのコミュニケーションスタイルと交友関係意識. 日本女子大学紀要人間社会学部, 17, 73-85.
- 尾崎かほる・久東光代 (2007b) 女子学生の友人とのコミュニケーション手段と交友関係意識一対面と携帯メールによる自己開示一. 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 415.
- 尾崎かほる・久東光代 (2009) 女子学生の友人への自己開示についての一考察(1)一対面と携帯メールによる自己開示度の比較一. 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 412.
- 尾崎かほる・久東光代 (2010) 女子学生の友人に対する対面と携帯メールによる自己開示と交友関係意識. 日本女子大学紀要人間社会学部, 20, 61-72.
- 尾崎かほる・久東光代 (2012) 女子学生の同性友人とのコミュニケーションと交友関係意識(2)一対面と携帯メールによる自己開示と交友関係意識一. 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 356.
- 尾崎かほる・久東光代 (2013) 女子学生の友人に対する対面と携帯メールによるコミュニケーションと交友関係意識. 日本女子大学紀要人間社会学部, 23, 29-44.
- 植村勝彦・松本青也・藤井正志 (2000) コミュニケーション学入門. ナカニシヤ出版.